



NEJIREBANE, No. 114, 5. Sep. 2005

中條道夫先生とオオキノコムシ

Dr. Michio CHÛJÔ and Erotylidae

大澤 省三 Syozo OSAWA

〒732-0067 広島市東区牛田旭2丁目4番7-1003号

昨年の6月、ご家族からの電話で中條道夫先生のご逝去を知った。95歳のご長命だったとはいえ、まことに残念の極みである。先生の御経歴や業績は、佐々治会長を始め幾人の方が「ねじればね」や「甲虫ニュース」に書いておられるので、なるべくそれらの方々の記事と重複しないように私の個人的な思い出を記しておきたい。

先生と最初にお会いしたのは、いまから57年前の1948年である。当時、私は名古屋大学理学部生物学科の学生で、中根猛彦先生の部屋に同居させていただいていた。ある日、中條先生が朝比奈正二郎、黒沢良彦の両先生と共に中根先生を訪ねてこられた時のことである。先生はこのことをよく覚えておられ、後年、私の家内に「大澤君はあの時はまだ学生服を着た坊主頭の学生さんでしたよ」と語られた。先生は、ダブルの背広がよくお似合いの紳士だという記憶があるのと、中根先生が台湾のテントウダマシの新種を先生に見せて、いまから書きます、といったような会話を覚えている。そのテントウダマシは1951年の *Insecta Matsumurana*, 17: 113-118 に *Chondria nigropunctata* として記載された。余談だが、私は10年程前に台湾の余清金さんから新種と思われる *Chondria* の標本をもらい、記載しようと写真まで撮ったがオサムシの研究で忙しく、すべての標本は私の手元を離れたので、どなたかに記載していただきたいと思っている。

さて、私は名古屋で先生にお会いしてから数年後に、昆虫をやめて分子生物学に転向したので、先生とは、年賀状のやりとりだけでご無沙汰していた。ところが、1965年に名古屋から広島大学へ

移り、当時名古屋にはほとんどいなかったアオドウガネやキボシカミキリが沢山いるのをみて、再び虫屋の業が頭をもたげ、甲虫の採集を再開することとなった。広島虫の会へ入会して澤野十蔵先生、中村慎吾さん、小阪敏和さんや、岡本巖さんらと知り合いになり、三段峡や宮島をはじめ県内のあちこちへ日曜、休日はほとんど虫取りに明け暮れた。集菌性の甲虫、とくにオオキノコに興味をもち、当時としてはかなり珍しいものを含めて30種くらいは集めようか。カタモンチビ*、コヒゲチビ*、ツマグロチビ、トモンチビ*、ヒゴノムネビロ*（当時は本州未記録）などがその代表的なもので、リストを作り広島虫の会会報に載せ、別冊を中條先生や中根先生に送った。中條先生からは早速返事をいただいた。現在、Fauna Japonica の Erotyridae 執筆の最終段階だが、幾つか材料がなく、一部は中根さんの標本を図の描写のため利用させてもらったが、なお検討したいので私のリストの中の幾つか（*印）を拝見したいとのこと。早速、これらと他の数種を先生に謹呈したところ、大変役に立ったと丁寧な礼状をいただき、その上 Fauna Japonica の中には私の送ったものをすべて記録して下さった。上に書いた“他の数種”の中には、私がカタベニチビ *Tritoma tripartaria* に似ているが、どうも違うようなものがあったので、先生に意見をうかがったところ「私は之は *Cyrtotriplax (=Tritoma) tripartaria* LEWIS だと考えます。之は以前、馬場金太郎君からも三段峡で採集したものを一頭貰いました。これについては貴兄らがさらに詳しく検討してください」（原文のまま）とあった。それでは、私がカタベニチビと思っているもの（中條先生の日本動物分類、大蕈虫科、1936 で同定）は何か？ということになる。これは広島では普通種で、宮島でも三段峡でもかなり採集していた。ちなみに、先生の1936年のモノグラフは、いわゆる素木標本も美しく図示、記載されていて、南方のオオキノコを調べるときにはなほだ有用である。話はかなり飛んでの後日談になるが、1980年頃、中根先生が鹿児島大学在任中、非常勤講師で分子進化の話をしてくれと頼まれ、3日くらい講義をしたことがあった。その折、例の *tripartaria* の話が出て「中條さんが *tripartaria* と同定したのはまさに *tripartaria* そのもので正しく、君が言っているのは new だからそのうちに記載しましょう」というような経緯でオオサワチビオオキノコ *Tritoma osawai* が誕生したのである。この間の事情は広島虫の会会報に簡単に書いておいたが、地方誌のせいもあってほとんど読まれていないようである（広島県のカタベニチビオオキノコムシとその近似種について。広島虫の会会報、21: 4, 1982）。当たり前のことだが中條先生は正しかった！ *osawai* のほうは、当時 *tripartaria* だと信じていたので、中條先生に送らなかったのが私のミスであった。

さて、話を前にもどそう。Fauna Japonica が目出度く出版されたころ（1969）、先生から「5月下旬に広島で日本動物学会中国・四国支部大会があり、是非出席するのでお会いしたい」との来信があって20年ぶりにお目にかかることが出来た。拙宅（といっても狭いボロの公務員宿舎）へお越しください、虫談に花をさかせた。私が佐々治会長の退官の本 SUKUNAHIKONA (2001), p. 1 に書いた「敬愛するM先生」云々、のM先生とは中條先生のことである。このとき、先生からいろいろと台湾の採集談など面白い話をうかがったが、その中の1, 2を紹介しよう。その一つ。先生が三輪博士と採集に行かれ、途中で一服したが、そこにあった大きな朽ち木を捕虫網の先でくずしたら、明らかに新種とみてとれる大きくて美しいコメツキがころがりだした。コメツキ専門の三輪先生が羨ましそうだったので、*chujoi* と命名してくれたらあげます、と冗談にいわれたら、ほんとうに *Pristilophus chujoi* となってしまった（和名チュウジョウコメツキ）と。また、中條先生が、若かりしころの GRESSITT 博士と鳥来へ採集に行ったときのこと、「高くをクワガタモドキが飛んでいるのを見つけたが取り逃がしてしまった。ところが若い GRESSITT 君がこれを追いかけて見事、網にした」など・・・

その後、大学紛争で日本中の大学は荒れくるい、中條先生の香川大学も私のいた広島大学も、勿論その例外ではなかった。紛争もあらかた下火になりかけた頃（多分1974年）、先生から香川大学で非常勤講師として分子生物学の講義を3日間やってくれないか、との電話をいただき、高松で先生のお世話になることとなった。なぜ分子生物学ですか、とお尋ねしたら、「私は新しいものが好きでね。分子とこれまでやって来た形態分類との関係には非常に興味があるので。新しいものと

いえば、このこうもり傘もワン・タッチで開く最新のものでね」と。いまでは珍しくもないが、当時は目にしたこともない“新種”の傘だった。高松滞在中は、ご自宅で奥様の手料理をご馳走になったり、屋島や栗林公園へご案内していただいたりした。栗林公園ではミヤマカミキリ（シロスジカミキリだったかもしれない）が大発生して駆除の相談をうけている、といっておられたのが記憶に残っている。先生の研究室は粗末な木造バラックの中の薄暗い一室だったが、片隅の机上にはビノキュラーと標本箱が置かれ、東南アジアのオオキノコを調べておられた。「あまりにも次々と新種がでるので、つける名前がなくなり、とうとう黒い翅に赤い紋のあるものに *stendahli* という名をつけました」と。勿論、有名なスタンダードの“赤と黒”からの連想である。帰りには、今の私なら持ちきれないくらいの量の先生の別冊をいただき、あらためて碩学ぶりを印象付けられた。なかでも、分厚い何冊かの台湾のハムシのモノグラフ（先生の学位論文）には感激し、今も大切に手元に置いている。

中條先生は香川大学を定年退官、名城大学へ移られ、住居も三島へ移されが、三島から名古屋まで新幹線で通勤されてなお研究を続けておられた。私は広島大学から名古屋大学へ移り、三島の国立遺伝学研究所の運営評議員も務めることになったので、時々、三島へ出張、空き時間に先生のお宅を訪問した。台湾の話や、名古屋での研究のことなどを話して下さった。香川大学時代の台湾遠征の際、同行の連中が血眼になってとりたがっていたフトオアゲハを私だけがちゃっかり手に入れたのだと、その標本を見せていただいたが、ほんとうに嬉しそうだった。

私は、名古屋大学在籍中に研究材料のプラナリアを採集する目的で、数回台湾を訪れた。子供の頃からのあこがれの台湾では本来の目的そっちのけで虫とりに夢中になり、余清金さんや、陳文龍さんと知己になることが出来た。台湾のオオキノコは中條先生や、荒木東次さん、後に中根先生がかなり徹底的に調べられ、ほとんど新しいものがでる余地はないと思っていた。ところが、陳さんから譲り受けたものの中に、一見既知の *Episcapha* にみえるが、どうも違うものが2頭あり、よく調べてみると *Episcapha* ではなく、*Micrencaustes*（日本にはいない）の一種らしいことが分かった。この属は南方に多いもので、台湾から荒木さんが一種だけ記載しておられる。しかし、手元のものとは明らかに別種だと分かった。このことを中條先生に報告したら、多分新種だが、南方のものと比較する必要があるので、特に HELLER の論文を見るようにと教えられた (HELLER, K. M., 1918 (20): Beitrag zur Kenntnis der Erotyliden der Indo-Australischen Region mit besonderer Berücksichtigung der Philippinischen Arten. Arch. f. Naturg., 84 (Abt A): 1-120)。そこで大学図書を通じて原論文の copy を入手、また ARROW の Fauna of British India, Erotyridae をはじめ、旧世界のオオキノコの文献をできるだけ集めた。検討の結果、やはり新種であることが分かったので、当時、九大彦山生物研におられた先生のご子息、道崇さんと計って *michioi* と命名しようということになり、共同で記載をつくって *Esakia* No.29: 69-71 (1990) に掲載してもらった。これより少し前(1988~90)に先生は道崇さんと共著で旧世界のオオキノコのカatalogを完成されていたが、「こんな大きくてきれいなものが台湾に未記載で残っていたとは驚きで、私のオオキノコの研究の掉尾を飾るものだ」と大変喜ばれた。このこともあって、私は台湾のオオキノコをもう少し調べたいと考え、かなり標本を集めた。大体は同定できたが、中には分からないものが幾つかあり、多分未知のものも含まれていると思われた。しかし、本職が忙しくて手がつかず、そのまま定年を迎えた。その後 JT 生命誌研究館 (BRH) に務めたが、ここではオサムシの分子系統を始めたので、集めた



Microencaustes michioi OSAWA et M.T. CHŪI,
体長 13 mm; 台湾高雄県六龜付近

オオキノコもそのまま日の目を見ないでいた。ところが、ある日、オオキノコにも興味をもっておられる A さんが BRH へ来られたので、標本と文献をすべて彼に託し、研究を依頼した。何時の日にか調べてもらえるのを楽しみにしている。

BRH 在職中はオサムシの分子系統をやる傍ら、「おさむしニュース・レター」を手作りで発行。20号まで続けた。毎号、中條先生にもお送りしたが、その度に便箋数枚に感想をまじえた丁寧な礼状をいただいた。20号の時は「年賀状を書くのがやっつとで、手紙を書くのがだんだん苦手になりました」と電話を下さったのには、かえってご迷惑だったかと反省している。それにしても、200名にニュース・レターを無料配布していたのに、受け取りの葉書一枚すら一回もくれなかった新人類(と思われる)がかなりあったのは時代を象徴しているのだろうか。

いろいろ思い出は尽きないが、このあたりで擱筆することにしたい。先生は80歳すぎまで研究を続けられた。私も今年は喜寿とやら、しかも去年は心筋梗塞で地獄の淵(極楽へは行けそうにない)を覗いてきたので、はたして先生の歳まで研究ができるかどうか自信はないが、できるだけの努力はするつもりである。私の精神的な支柱であった先生の御霊前にこの小文を捧げ、心からご冥福を祈りたい。
(おおさわしょうぞう; osawasyozo@nifty.com)

日本産ホンジョウカイ属 (ジョウカイボン科) の学名について

Some Modifications of the Scientific Names of *Cantharis* Members (Cantharidae) from Japan

奥島 雄一 Yūichi OKUSHIMA

〒710-0046 岡山県倉敷市中央2-6-1 倉敷市立自然史博物館

佐藤 正孝 Masataka SATŌ

〒458-0804 名古屋市緑区亀が洞3-1404 ディアクオーレ徳重306

日本産ホンジョウカイ属 *Cantharis* LINNAEUS については、筆者らがまとめをしたが (SATŌ *et al.*, 2002), その後、いくつかの情報が得られ、学名を変更する必要がでてきたので、再度整理しておくことにした。また、先の論文には著者らの責任による手落ちもいくつか見つかったのでこの際、訂正しておきたい。

1. *Cantharis (Cyrtomoptila) curtata* KIESENWETTER, 1874 ムネアカフトジョウカイ

SATŌ *et al.* (2002) では、次種とともに *Wittmercantharis* 亜属に所属させていたが、ŠVIHLA (2004b) により、*Wittmercantharis* SATŌ, 1986が *Cyrtomoptila* MOTSCHULSKY, 1859 のシノニムとして処理されたため、学名は上記のように変更となった。*Cyrtomoptila* はヨーロッパに産する *Cantharis lateralis* LINNAEUS, 1758を基準種として設立されている。

2. *Cantharis (Cyrtomoptila) plagiata* HEYDEN, 1889 ホツカイジョウカイ

亜属名については前種と同様である。種小名についてはこれまで日本では *vulcana* が使用されてきたが、ŠVIHLA (2004b) により、*Telephorus vulcanus* LEWIS, 1895 はほかのいくつかの学名とともに中国 (Kan-ssu) から記載された *C. plagiata* のシノニムとして処理された。

3. *Cantharis (Telephorus) figurata* MANNERHEIM, 1843 ヒメチャイロジョウカイ

これまで日本では、本種の種小名に *pallida* を使用していたが、以下のような理由で *figurata* を

あてておく。 *C. figurata* はフィンランドから記載された種で、ŠVIHLA (2004a) によると、これまでにヨーロッパ北部・西部・中央部、カザフスタン北部・中央部、ウズベキスタン、シベリアから記録が知られている種である。

かつて奥島が、モスクワの KAZANTSEV 博士に同定をお願いしておいた標本が、2003 年 2 月、6 年ぶりに返却されてきた。その中には北海道産のヒメチャイロジョウカイも含まれていたのであるが、国内の研究者のその時点での共通見解であった *C. pallida* という学名ではなく、“*Cantharis figurata* MANN.” と同定ラベルが付けられてきた。これはどういうことかとさっそく KAZANTSEV 博士に問い合わせたところ、「*C. pallida* と *C. figurata* については複雑な問題を残している。現在のところの（ヨーロッパの研究者の）認識では、*C. pallida* は中央ヨーロッパの山地に限って分布すると信じられており、これまでのロシアからの *C. pallida* の記録も全部ではないにしても多くが *C. figurata* を指していると思われる。そして、（奥島が同定依頼した）北海道産の標本も確かに *C. figurata* であった。しかし、この問題の決着には双方のタイプ標本の調査が必要である」（KAZANTSEV 博士から奥島への私信）との回答をいただいた。タイプ標本の調査を待たなければ確実な結論は出せないが、現状では、より信頼できる KAZANTSEV 博士の取り扱いに従っておく。

SATÔ *et al.* (2002) で *C. pallida* の検視標本として記録したイタリア産とアルジェリア産の標本（倉敷市立自然史博物館所蔵）はチェコ国立博物館の ŠVIHLA 博士の 2001 年の同定によるもので、本来の *C. pallida* を指している可能性が高い。

一方、高橋直樹博士より、SATÔ *et al.* (2002) で、*C. pallida* のシノニミックリストに *C. melano-gastrica* と *C. pectoralis* を含めていないのはなぜか、とのお問合せをいただき、記憶をたどってみたが、どうやら、著者らの手落ちで KAZANTSEV (1994) の論文を参照・引用するのをすっかり忘れてしまったらしい。これら 2 種をシノニムに加ええない、といった特別な意図があったわけではない。お詫び申し上げます。

また、KAZANTSEV (1994) の論文で、シノニム処理されたうちの *C. baikalica* だけは SATÔ *et al.* (2002) でも引用されている。これは、日本産のシノニムだけを載録した高橋 (1998) の目録から引用したためであったと思う。

4. *Cantharis (Telephorus) heleocharis* SATÔ, OKUSHIMA et ISHIDA, 2002 ホタルジョウカイ (和名新称)

SATÔ *et al.* (2002) では和名を付けていなかったもので、ここで上記のように提唱しておく。タイプシリーズには青森、長野、三重の各県の標本が用いられたが、その後、岩手県からも記録された（高橋, 2003）。ちなみに、種小名の *heleocharis* とは、湿地を生息地とするこの種の特性から、「沼地の女神」の意を用いたものである。

なお、原記載で図のキャプションの種小名が “*hereocharis*” と誤った綴りになっている。正しくは上記のように “*heleocharis*” である。お詫びして訂正する。

謝 辞

今回の小文をまとめるにあたり、以下の方々にお世話になった。ロシア科学アカデミーの Sergei KAZANTSEV 博士にはヒメチャイロジョウカイについて最新の情報を提供いただいた。チェコ国立博物館の Vladimir ŠVIHLA 博士には文献を手配いただいた。九州大学の高橋直樹博士には *C. pallida* のシノニミックリストの不備をご指摘いただいた。平塚市の高橋和弘氏には文献情報をご提供いただいた。横須賀市の水沢清行氏には綴りのミスをご指摘いただいた。記してこれらの諸氏に厚くお礼申し上げます。

Summary

Japanese species of the genus *Cantharis* LINNAEUS, 1758 is rearranged based on the recent

references as follows:

1. *Cantharis (Cyrtomoptila) curtata* KIESENWETTER, 1874.
According to ŠVIHLA (2004b), *Wittmercantharis* SATÔ, 1986 was synonymized with *Cyrtomoptila* MOTSCHULSKY, 1859, so the subgeneric name was changed as mentioned.
2. *Cantharis (Cyrtomoptila) plagiata* HEYDEN, 1889.
According to ŠVIHLA (2004b), *Telephorus vulcanus* LEWIS, 1895 was synonymized with *C. plagiata* HEYDEN, 1889 from China.
3. *Cantharis (Telephorus) figurata* MANNERHEIM, 1843.
To the Japanese specimens from Hokkaido, we had given a name as *C. pallida* GOEZE, 1777, but Dr. KAZANTSEV determined it as mentioned. Nevertheless this species still has many problems for determination.
4. *Cantharis (Telephorus) heleocharis* SATÔ, OKUSHIMA et ISHIDA, 2002.
This has no problem, but we give a new Japanese name as Hotaru-jôkai.

<引用文献>

- KAZANTSEV, S. V., 1994. Supplementary remarks concerning the fauna of soldier beetles (Coleoptera, Cantharidae) of the Russian Far East. Zool. Zh., 73: 11–19. (In Russian with English summary)
- MANNERHEIM, C., 1843. Description de quelques autres nouvelles espèces de Coléoptères de Finlande. Bull. Soc. Imp. Nat. Moscou, 16: 88–99.
- SATÔ, M., Y. OKUSHIMA & K. ISHIDA. 2002. Japanese species of the genus *Cantharis* LINNAEUS (Coleoptera, Cantharidae). Ent. Rev. Japan, 57: 205–217.
- ŠVIHLA, V., 2004a. Contribution to the knowledge of the family Cantharidae (Coleoptera) from the western Palaearctic. J. natn. Mus., nat. Hist. Ser., Praha, 173: 77–88.
- ŠVIHLA, V., 2004b. New taxa of the subfamily Cantharinae (Coleoptera, Cantharinae) from southeastern Asia with notes on other species. Ent. basil., 26: 155–238.
- 高橋泰美, 2003. *Cantharis heleocharis* (ジョウカイボン科) の岩手県での記録. 月刊むし, 東京, (394): 12.

大阪市長居・自然史博物館の骨格標本作製砂場で採集した甲虫類 (2)

The List of Coleoptera Collected from the Sand Pit to make Bone Specimen, Osaka Museum of Natural History, Osaka City, Osaka Prefecture (2)

河上 康子 Ysauko KAWAKAMI

〒569-0826 高槻市寿町2-30-9



図1. 砂場の様子

筆者は大阪市立自然史博物館の敷地内に設置されている、脊椎動物の骨格標本作成砂場において、1999年9月から2003年9月までのべ53回、甲虫相調査を行った。これらの調査のうち2001年8月までに行った26回の記録は本誌102号(河上, 2002)で報告した。本報では2001年9月から2003年9月までの27回の記録を報告するとともに、全調査を通じて得られた若干の知見を報告する。

大阪市立自然史博物館は、都市公園緑地である長居植物園(242,000 m²)に隣接し、その圃

表1. 出現頻度の高い甲虫11種の採集月. ○印は出現した月, -印は未調査の月を示す

種名	採集年	採集月											
		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII
<i>Saprinus splendens</i> (Paykull) ルリエンマムシ	1999	-	-	-	-	-	-	-	-	○			
	2000						○	○	○				
	2001			○									
	2002						○	○	○	○			
	2003					○			○	○	-	-	-
<i>Hypocaccus sinae</i> (Marseul) ニセハマベエンマムシ	1999	-	-	-	-	-	-	-	-	○			
	2000			○	○	○	○		○				
	2001			○									
	2002					○			○				
	2003				○	○	○	○			-	-	-
<i>Creophilus maxillosus</i> (Linne) オオハネカクシ	1999	-	-	-	-	-	-	-	-				
	2000						○	○					
	2001											○	○
	2002	○		○	○	○	○						
	2003										-	-	-
<i>Aleochara parens</i> Sharp コクロヒゲブトハネカクシ	1999	-	-	-	-	-	-	-	-				
	2000							○					
	2001		○	○								○	○
	2002					○	○	○	○				
	2003					○			○	○	-	-	-
<i>Dermestes haemorrhoidalis</i> Kuster カドマルカツオブシムシ	1999	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○		
	2000												
	2001				○								
	2002					○			○				
	2003									○	-	-	-
<i>Dermestes maculatus</i> Degeer ハラジロカツオブシムシ	1999	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○		
	2000		○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	2001	○	○	○	○	○	○	○					
	2002				○	○	○		○	○		○	
	2003	○			○	○				○	-	-	-
<i>Dermestes coarctatus</i> Harold カドムネカツオブシムシ	1999	-	-	-	-	-	-	-	-	○			
	2000				○	○							
	2001				○	○		○	○				
	2002			○	○	○	○	○	○	○			
	2003				○						-	-	-
<i>Necrobia ruficollis</i> (Fabricius) アカクビホシカムシ	1999	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○		
	2000						○		○			○	
	2001					○					○		
	2002							○	○				
	2003										-	-	-
<i>Necrobia rufipes</i> (Degeer) アカアンホシカムシ	1999	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○	○	○
	2000	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	2001	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	2002	○	○	○		○	○		○	○		○	○
	2003	○	○								-	-	-
<i>Omosita discoidea</i> (Fabricius) ヘリグロヒラタケシキスイ	1999	-	-	-	-	-	-	-	-				
	2000			○	○	○							
	2001			○	○								
	2002			○									
	2003		○								-	-	-
<i>Gonocephalum coenosum</i> Kaszab ヤマトスナゴミシダマシ	1999	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○		
	2000					○		○		○	○		
	2001	○					○						
	2002					○	○	○				○	
	2003			○		○	○	○			-	-	-

表2. 出現した甲虫種の記録. 数字は採集個体数を示す

種名	2001									
	22-IX	25-X	22-XI	20-XII	12-I	9-II	9-III	7-IV	22-V	
Carabidae オサムシ科										
<i>Aepheidius adelioides</i> (MacLeay) トゲアトクリゴミムシ									1	
Histeridae エンマムシ科										
<i>Gnathoncus nanus</i> (Scriba) マルマメエンマムシ						1				
<i>Saprinus splendens</i> (Paykull) ルリエンマムシ										
<i>Hypocaccus sinae</i> (Marseul) ニセハマベエンマムシ									1	
<i>Carcinops pumilio</i> (Erichson) クロチビエンマムシ										
<i>Merohister jekeli</i> (Marseul) エンマムシ										
Staphylinidae ハネカクシ科										
<i>Anotylus cognatus</i> (Sharp) セスジハネカクシ									1	
<i>Leptacinus japonicus</i> Cameron (和名なし)	1			1						
<i>Xantholinus suffusus</i> Sharp キバネナガハネカクシ				1						
<i>Philonthus rectangulus</i> Sharp カクコガシラハネカクシ	1						1		1	
<i>Philonthus wuesthoffi</i> Bernhauer ヒメホソコガシラハネカクシ				1						
<i>Philonthus solidus</i> Sharp ヘリアカバコガシラハネカクシ				1						
<i>Creophilus maxillosus</i> (Linne) オオハネカクシ				5	5	1		5	9	10
<i>Aleochara parens</i> Sharp コクロヒゲブトハネカクシ	1	1	1							4
Scarabaeidae コガネムシ科										
<i>Onthophagus atripennis</i> Waterhouse コブマルエンマコガネ				1						
<i>Aphodius nigrotessellatus</i> Motschulsky セマダラマグソコガネ										
<i>Aphodius rectus</i> (Motschulsky) マグソコガネ				1						
Dermestidae カツオブシムシ科										
<i>Dermestes haemorrhoidalis</i> Kuster カドマルカツオブシムシ										1
<i>Dermestes maculatus</i> Degeer ハラジロカツオブシムシ									1	8
<i>Dermestes coarctatus</i> Harold カドムネカツオブシムシ								1	3	1
Cleridae カッコウムシ科										
<i>Necrobia ruficollis</i> (Fabricius) アカクビホシカムシ				1						
<i>Necrobia rufipes</i> (Degeer) アカアシホシカムシ	12	17	4		8	2	1			1
Melyridae ジョウカイモドキ科										
<i>Laius historio</i> Kiesenwetter ヒロオビジョウカイモドキ										
Nitidulidae ケシキスイ科										
<i>Omosita discoidea</i> (Fabricius) ヘリグロヒラタケシキスイ								5		
Tenebrionidae ゴミムシダマシ科										
<i>Gonocephalum coenosum</i> Kaszab ヤマトスナゴミムシダマシ										1

場内に 28 m² の砂場を設置している. この砂場には脊椎動物の骨格標本を作製するために常時, 少量の筋肉が残った状態の骨格が砂に半分埋没されている (図1). 調査方法は毎月ほぼ1回, この砂場の骨格に付着したり砂の中にある甲虫目の成虫を, 目視で採集した.

53回の調査で採集した甲虫目は 12 科 40 種 972 個体であった. これらの記録のうち, 2001 年 9 月 22 日から 2003 年 9 月 21 日までの結果を表 2 に示す. 採集者はすべて河上, 標本はすべて大阪市立自然史博物館に収蔵されている.

全調査期間を通じて出現頻度の高かった上位11の種については, 出現した月を年別に示す (表1). 表1からこれら 11 種の成虫は, 通年で出現する種, 春から秋にかけて出現する種, 春のみに現れる種に概ね分類されることがわかった. コクロヒゲブトハネカクシ *Aleochara parens* SHARP, ハラジロカツオブシムシ *Dermestes maculatus* DEGEER, アカアシホシカムシ *Necrobia rufipes* (DEGEER), ヤマトスナゴミムシダマシ *Gonocephalum coenosum* KASZAB の4種は, ほぼ通年で成虫が観察された. オオハネカクシ *Creophilus maxillosus* (LINNÉ) は 8-10 月を除く期間に出現した. 冬季はいずれの種も骨の隙間や砂の中に潜り, 摂食や交尾の活動は見られなかった. ルリエンマムシ *Saprinus splendens* (PAYKULL), ニセハマベエンマムシ *Hypocaccus sinae* (MARSEUL), カドムネカツオブシ

大阪府泉南市と和歌山県日高市からの キバナガミズギワゴミムシの記録

Records of *Armatocillenus yokohamae* from Sennan City, Osaka Prefecture and Hidaka City, Wakayama Prefecture

河上 康子 Yasuko KAWAKAMI

〒569-0826 高槻市寿町 2-30-9



キバナガミズギワゴミムシ *Armatocillenus yokohamae* (BATES) (図 1) は、河口干潟の潮間帯に特異的に生息する種で、BATES (1883) により神奈川県川崎市から記載された。北海道から奄美大島まで広く分布しており (上野ほか, 1985), 大阪湾近郊沿岸でもかつては多くの産地があったと思われる。しかし、近年の急速な河川の護岸化による河口干潟とヨシ原の消失により、関西の内海地域では 1974 年 (伊藤ほか) 以降、2002 年の大阪府淀川河口 (河上) と兵庫県加古川河口・揖保川河口 (稲畑) から記録されているに過ぎない。また和歌山県からは、1984 年 (田中) の白浜町, 日置川町, 新宮市からの初記録以降、山本 (2004) により白浜町から報告されているのみである。

筆者は大阪府泉南市男里川河口と、和歌山県日高市日高川河口から本種を採集したので報告する。採集環境はいずれも、干潮時のヨシ原の周辺部にあたる泥質の干潟表面で、打ちあがった海藻の下や、転石の下から採集した。両採集地ともに約2時間の調査を行った結果、男里川での生息数はごく限られていたが、日高川では多数の個体が観察された。淀川河口における確認個体数も非常に限られていた (河上, 2002) ことから、日高川河口の干潟環境が比較的良好であると考えられることに対して、大阪府下での本種の生息地は危機的な状況にあるものと思われる。

男里川河口は大阪府の泉南地域から初めての記録 (大阪府, 2000) であり、日高川河口は田中 (1984) により私信として参考に付記されている産地であるが、文献記録 (的場, 1994) としては今回が初めてになる。本種の同定は筆者が行い、標本はすべて大阪市立自然博物館に収蔵されている。末筆になるが、記録の公表を勧めた伊藤昇氏と、文献入手に援助を頂いた大橋和典氏 (京都大学) に厚く御礼申しあげる。

Armatocillenus yokohamae (BATES) キバナガミズギワゴミムシ

大阪府泉南市男里川河口中州 (8 exs., 2. VI. 2003, 河上採集; 1 ex., 18. IV. 2004, 河上採集)

和歌山県日高市日高川河口左岸 (18 exs., 23. V. 2004, 河上採集)

<引用文献>

- BATES, H.W. (1883) Supplement to the geodephagous Coleoptera of Japan, chiefly from the collection of Mr. George LEWIS, made during his second visit, from February, 1880, to September, 1881. Trans. ent. Soc. London: 268.
- 稲畑憲昭 (2002) 兵庫県からのキバナガミズギワゴミムシの記録. きべりはむし 30 (1): 99.
- 伊藤修四郎, 保田淑郎, 大倉正文, 後藤光雄 (1974). 昆虫類. 淀川の河川敷における生態調査報告書. 近畿地方建設局: 91.
- 河上康子 (2002) 淀川河口からのキバナガミズギワゴミムシの記録. Nature Study, 48 (10): 9.
- 的場績 (1994) 和歌山県産甲虫類既報の整理. KINOKUNI, 46: 20.
- 大阪府 (2000) 昆虫類. 大阪府野生生物目録: 69.
- 田中昭太郎 (1984) 和歌山県とその周辺の歩行虫 (1). KINOKUNI, 26: 18-20.

上野俊一ほか (1985) 原色日本甲虫図鑑(II). 保育社: 92.
 山本博子 (2004) 白浜町我が家周辺の昆虫類採集記録. KINOKUNI, 65: 11.

対馬のナルカワマルテントウダマシの記録

The Record of *Idiophyes satoi* SASAJI (Anamorphidae) from Tsushima Is.

生川 展行 Nobuyuki NARUKAWA

〒513-0015 鈴鹿市木田町 2399

Idiophyes satoi SASAJI ナルカワマルテントウダマシは、三重県三重郡菰野町千草で得られた個体を基に、2003年に新種として記載発表された種で、♂の上翅端には大きなコブがある。

原記載以降は、生川・市川 (2004) により三重県三重郡菰野町竹成で、住宅の中で採集された1♂1♀が記録されているに過ぎないが、最近、筆者は長崎県在住の松尾照男氏より、対馬で採集された個体を恵与いただいたので、新産地として報告しておく。なお貴重な標本をお送りいただいた、松尾照男氏に心よりお礼申し上げる。

長崎県対馬市厳原町小浦, 1♂, 26.V.2001, 下條清隆採集

標本をお送りいただいた松尾氏によると、対馬での採集状況は不明であるとのことであった。

<文 献>

生川展行・市川太 (2004) ナルカワマルテントウダマシを採集. ひらくら, 48 (1): 7.

SASAJI, H. (2003). A new additional species of the Anamorphidae (Coleoptera, Cucujoidea) from Japan. Spec. Bull. Jpn. Soc. Coleopterol. (6): 229-302.

屋久島からのチビシテムシ亜科甲虫の記録

Records of Cholevid Beetles (Cholevinae: Leiodidae: Coleoptera) from the Island of Yaku-shima, Kagoshima Prefecture.

春沢 圭太郎 Keitaro Harusawa

〒589-0022 大阪狭山市西山台 2-11-12

2000年、筆者は屋久島を訪れる機会を得、島内各地で5種類のチビシテムシを確認することができた。屋久島からは、すでに *Catops hilleri* KRAATZ ヒレルチビシテムシ (中根, 1984) と *Catopodes fuscifrons* KRAATZ クシヒゲチビシテムシ (久松・林, 1985) の2種が記録されていたが、新たに *Micronemadus pusillimus* (KRAATZ) クリバナチビシテムシ, *Catops miensis* NAKANE コクロチビシテムシ, *Prionochoeta harmandi* PORTEVIN オオクロチビシテムシの3種類を確認することができたので他の種類の記録と併せて報告しておきたい。データ中の(S)はピットフォールトラップ(ベイトにイカを使用)による採集を示す。

報告に先立って、島内での調査にあたって便宜を図っていただいた大阪市の桂孝次郎、奥野晴三両氏に厚くお礼申し上げる次第である。

検視標本.

Micronemadus pusillimus (KRAATZ) クリバネチビシデムシ

1♂, 2♀♀, 屋久町大川林道・花山登山口, 520 m, [30°19'12"N, 130°25'56"E], 3~4. V. 2000, K. HARUSAWA leg., (S); 2♂♂, 5♀♀, 上屋久町カンカケ岳東斜面, 400 m, [30°22'19"N, 130°24'40"E], 5. V. 2000, K. HARUSAWA leg., (シカ死体)

Catops sp. (*hilleri* group) ヒレルチビシデムシ種群の一種

9♂♂, 6♀♀, 同上データ (花山登山口); 27♂♂, 14♀♀, 同上データ (カンカケ岳東斜面)

Catops miensis NAKANE コクロチビシデムシ

1♂, 同上データ (花山登山口); 1♂, 同上データ (カンカケ岳東斜面)

Prionochaeta harmandi PORTEVIN オオクロチビシデムシ

7♂♂, 3♀♀, 同上データ (カンカケ岳東斜面)

Catopodes fuscifrons KRAATZ クシヒゲチビシデムシ

1♂, 4♀♀, 上屋久町国割岳西斜面・西部林道, 190 m [30°20'57"N, 130°23'21"E], 3~5. V. 2000, K. HARUSAWA leg., (S); 2♂♂, 3♀♀, 同上データ (カンカケ岳東斜面)

<参考文献>

久松 定成・林 靖彦, 1985. チビシデムシ科. p.241-245. 原色日本甲虫図鑑. 保育社, 大阪.

NAKANE, T. 1956. New or little-known Coleoptera from Japan and its adjacent regions. XII. Sci. Rep. Saikyo University, (A), 2: 159-174.

中根 猛彦, 1984. 屋久島に産する甲虫類について. p. 587-631. 屋久島原生自然環境保全地域調査報告書. 環境庁 自然保護局.

岡留 恒丸, 1973. 屋久島の昆虫相. 179 pp., 6 pls. 屋久町教育委員会. (チビシデムシ亜科の記録なし)

[虫屋の広場]

地域別総合甲虫目録

◎ 区市町村単位目録・小地域目録

01. 福岡県飯塚市

・山脇好之 (2004), 笠置山(飯塚市)の鞘翅目 (22), Kasagi, (14), 205-214. [280 種] (総合計) [1603種]

02. 佐賀県武雄市

・今坂正一・西田光康 (2004), 武雄市宇宙科学館周辺の甲虫相, 佐賀の昆虫, (40): 771-804. [63科, 447 種]

03. 徳島県吉野川市

・吉田正隆ら (3名) (2005), 徳島県吉野川市美郷地域の甲虫, 徳島昆虫, (15): 59-84. [73 科, 630 種]

04. 熊本県あさぎり町白髪岳

・城戸克弥・小田正明 (2004), 熊本県あさぎり町白髪岳で採集した甲虫類 (7), KORASANA, (72): 21-25. [127 種] (合計) [501 種]

05. 佐賀県七山村

・城戸克弥 (2004), 佐賀県七山村浮岳の甲虫類 [I], 佐賀の昆虫, (40): 805-814. [225 種]

06. 福岡県志摩町

・城戸克弥 (2004), 福岡県志摩町の甲虫類, 糸島の自然, (7): 17-24. [+42 種]

07. 長野県伊那市

・中村寛志ら (4名) (2005), 信州大学農学部附属AFC西駒ステーション桂小場試験地 周辺における昆虫相 (1) コウチュウ目 (Coleoptera)・カメムシ目 (Hemiptera), 信州大学農学部AFC報告, (3): 37-49. コウチュウ目: 37-46. [28 科, 166 種]

08. 鳥根県益田市

・松田 賢・中村慎吾 (2005), 鳥根県高津川の昆虫類, 2000 年の調査結果, ホシザキグリーン財団研究報告, (8): 99-172. [46 科, 438 種] (合計) [552 種]

09. 三重県松阪市(旧・嬉野町)

・今村隆一 (2004), 嬉野町昆虫類甲虫目録, 「嬉野史一自然編」(嬉野町, 476 pp.), 121-124. 421-431. [33 科, 248 種]

◎ 都道府県単位目録

[福島県]

・木元達之助 (2005), 福島県で採集した甲虫類 (1990-2003 年), InsecTOHOKU, (11): 11-17. [28 科, 87 種]

<機関誌紹介>

昆虫 DNA 研究会ニュースレター

おさむしニュースレター, 蝶類 DNA 研究会ニュースレターがそれぞれ発行を終え, それらを引き継ぐかたちで昆虫 DNA 研究会が 2004 年度に発足, 研究会の開催や「昆虫 DNA 研究会ニュースレター」の発行を開始した. 昆虫の DNA 研究もいろいろな毀誉褒貶を経てここまでできたかと感慨ひとしおである. ニュースレターは 2 号まで発行されているが, 甲虫関係の報文も多く, 興味のある方は是非見ていただき, さらには入会して活躍していただきたい. ニュースレターの中で甲虫関係だけの題名を以下に紹介しておく.

No. 1 (2004. 9 発行, 48 pp.)

*中峰 空: セダカコブヤハズカミキリの分子系統解析; *日和住政・草桶秀夫: ホタルの分子系統樹から見た地理的分布と遺伝的分化; *大場裕一: 発光甲虫の進化. その他, 研究会要旨。

No. 2 (2005. 3 発行, 60 pp.)

*大澤省三: 亜種や雑種は種に分化しうるか?; *河野和男: 人はなぜ虫を集め, 進化を考え, それを語るのか?; *富永 修・岡本宗裕・井村有希・蘇 智慧・大澤省三・小鹿 亨・柏井伸夫・秋田勝巳: 日本のオオオサムシ属 *Ohomopterus* 相の形成, 特に近畿・中部日本系について ~分子系統樹からの推定; *荒谷邦雄・細谷忠嗣: 鳥流しにあったハチジョウノコギリクワガタに一体何が起こったか? 遺存固有か? 分子系統生物地理学からのアプローチ. その他, 研究会要旨。

事務局: 〒559-8570 堺市学園町 1-2 大阪府立大学先端科学研究所 RI生物環境科学研究分野内 昆虫 DNA 研究会 (Tel. 072-254-9862; Fax . 072-254-9938; E-mail yagi-t@osakafu-u.ac.jp; ニュースレター編集: 八木孝司 (大阪府立大学); 2004 年度代表幹事: 渡辺一雄 (広島大学), 2005 年度加藤義臣 (国際基督教大). (大澤省三)

地域甲虫自然史 (1): 荒田家の邸宅内で採集された甲虫の目録 訂正
水野弘造

首記の目録のカラー口絵最終頁下段左端の写真はマダラケシツブゾウムシ *Smicronyx madaranus* ではなく チビクチカクシゾウムシ *Deiradocranus setosus* である, との指摘を的場 績氏ならびに沢

田佳久氏より連絡いただいた。該当図の種名を訂正する。

ゾウムシ類については従来、的場績氏あるいは沢田佳久博士に同定を依頼して正確を期していたのであるが、21世紀になってからは時間の制約から水野が総合わせ定を行ったために今回のような例が生じて関係の皆様にご迷惑を掛ける結果となった。不明を恥じてお詫びしたい。目録本文 84頁 15番の項目も削除し、順番はおかしくなるが、

15. *Deiradocranus setosus* (MORIMOTO) チビクチカクシゾウ [65-26]

舞鶴市高野台, 2. V. 2003, 荒田弥五郎.

と訂正していただきたい。合計の種数には変わりはない。

ご教示いただいた的場 績氏ならびに沢田佳久氏に厚く御礼申しあげる。

地域甲虫自然史シリーズ、今後の予定 (編集部)

今年度の和佐又山採集会も 29 名の参加者で盛りあがりしました。従来予告していましたように、和佐又山周辺で採集された甲虫目録を、第 2 号として 2006 年度に発行できるよう編集作業を進めております。2005 年 7 月時点で、1250 種となっていますからこのまま発行しても恥ずかしくない目録ではありますが、1 種でも多く積み上げたいと願っています。採集会には参加されていない会員の皆様もデータを所持されている場合は 担当・水野弘造まで連絡くだされば、種ごとに登録・未登録をお答えしますので、ぜひご協力ください。甲虫学会全体で目録を作成できれば、これに過ぎる喜びはありません。

なお、採集会を開催した葦崎市御座石鉱泉一鳳凰山の目録も平行して編集しております。ここでは、鳳凰小屋の細田倅市氏が抜群の腕前で 20 年近くも甲虫を採集してこられましたため、既に 2500 種を上回る目録になっています。氏の採集品で *hosodai* の名の付いたコメツキ、ハネカクシ、ゴモクムシなどご記憶の方も多いでしょう。ただ氏は山小屋経営のために山麓の調査にはベストシーズンに時間がとれず、普通種の欠落もままありますので、同様に本会会員の皆様のご協力が欲しい状況です。

編集部の準備状況は上のおりですが、「地域甲虫自然史」は会員の皆様が積極的に企画し参加されることが今後の発展の鍵であります。

特許庁が過去に「公開特許公報」に踏み切ったために日本の特許出願件数が世界一となった例にならって、「地域甲虫自然史」は内容審査をせずに、間違いが判明すれば、後で訂正することを条件に、刊行に踏み切ったシリーズです。誤同定を恐れずに地域目録を発表してください。

行事報告 2005年度春期例会報告

4月30日(日)春期例会が、大阪市立自然史博物館・集会室で開かれ、34名の参加があった。

午前中は会員相互の情報交換や同定依頼など自由懇談にあてられた。午後1時より佐々治会長による開会の辞につづき会務報告が各担当運営委員により行われた。続いて、京都大学の堀道雄教授による「日本列島での海浜性ハンミョウの分布と歴史」の講演が行われた。堀先生には数年前から講演の依頼をしていたが、海外出張等多忙で日程がとれず、今回やっと実現した。講演内容の一部を紹介する。

日本列島の沿岸部に生息するハンミョウは海浜性で大型種のルイス、カワラ、ハラビロ、イカリモンと小型種のシロヘリ、ヨドシロヘリの6種と内陸性のコ、コニワ、エリザの3種で、一地点ではその内2~4種が共存している..その分布様式を生んだ要因として食物をめぐる種間競争を考え、大顎の長さが重なる種は分布が重複しない(餌をめぐる形質転換が起こった)ことを明らかにし

